

菊作り

秋晴れの日が続きます。

シャツ一枚で過ごさせるなんて、最高に気持ちがいい。

大気の中に、ほんのひと粒、冷気がまぎっています。

昔の記憶をたどれば、そう、こんな時期でした、運動会は。

初物のみかんを食べました。

たくさん賞状をもらった子も、私のように何にももらえない子も、秋の日差しを浴びながらお弁当を食べました。

私の母は、海苔巻きを作ります。

運動会のお昼は、海苔巻きと決まっていました、我が家は。

そんなことを思い出しながら、家の近所を歩きます。

歩道に土が落ちています。

ちようど、植木鉢一個分くらい。

アスファルトの上に落ちていると、土もごみのように見えます。

地面のうえにあるのだったら、見分けもつかないし、ごみと思うはずもないのですが。

マンションの前です、土が落ちていたのは。

誰かがプランターの花の入れ替えをしたのでしょうか。

それとも、プランターごとゴミに出してしまったのかもしれません。

植木鉢ごと捨てられている、枯れかかった観葉植物。

よく見る光景です。

マンションが建つ前、そこには小さな家がありました。

家の前には、いつも土が置いてありました。でも、ごみではありません。

木の塀の前に、筵が敷いてあります。

おじいさんが、土を篩いにかけています。

横にはたくさんの菊の鉢。

秋には、素晴らしい菊が並びます。

おじいさんは、ほとんど一年かけて、菊作りをしています。

丁寧に土を篩っているときもありました。

枯れた菊の花を切っているときもありました。

植木鉢を洗っているときも。

いつもおじいさんはひとりでした。

静かです。

でも、寂しくは見えませんでした。

菊の花を育てていると言うよりは、これから咲く菊の花と静かに話をしているようでした。

菊人形、菊の品評会。

それまでの私は、大輪の菊を、実際に見たこともないのに、知りもしないくせに、あんなもの、人工っぽいよね、そんな印象でした。

いまでも、あまりその印象はかわりません、実を言うと。

おじいさんの菊はとってもきれいでした。

でも、私がおっと好きだったのは、おじいさんがいねいに篩っている土でした。

いや、違います。

土ではなくて、おじいさんが土を篩いにかけている、そのしぐさが好きでした。

筵の上に土がこんもり積もっていきます。

ふんわりしていて、さわってみたかった。

今日、あの店に行ったら、入り口に菊の鉢が置いてありました。

たぶんポットマムという品種。

黄色い花がたくさんついています。

おじいさんの菊に比べると、女優ひとりに対して、エキストラ何十人、そんな感じですよ。

かわいいエキストラですよ。

私以外に誰もいない店で、お茶を飲みました。静かですよ。

こんなとき、私はあのおじいさんを思い出します。

篩いにかける、という言葉は、普通、選別という言葉
葉を連想させます。

篩いに残ることが重要です。

私はあまり好きではありません。

ところが、おじいさんは全く逆のことをしていました。
た。

篩いにかけてられると、土は根っこや小石から自由になっ
て、柔らかくなっていきます。

篩いの下にたまった土が重要でした。

本来は、上も下も関係ないのに。

私は、案外、金網の上ばかり見てきたのかもしれない
ません。

自分にくっついてきたややこしいものを取り去って
ける。

そんな篩があったらなあ。

自分の気持ちがあふわふわになったらなあ。

「えっ、なにか？」

店主が、顔を出しました。

気づかぬうちに、私は声をだしていたみたいです。

「あっ、なにか甘いものでもほしいなあと思って。」
私は明るい声を出します。